



教員名 足立 泰久
ADACHI Yasuhisa

所属学部 看護学部

学位 博士(理学)

研究・ゼミテーマ (領域) エシカルと自然環境に関する研究

e-mail adachi(*)tgu.ac.jp

(*)を@に変更して送信してください。

主な教育・研究業績

researchmap

researchmapのURL: <https://researchmap.jp/read00108>

～学生への Message ～

看護学部生のみなさんは、本学の建学の精神『教育は徳なり』を基盤とする“学び”を直接的に具現化かつ実質化したアクティブ・ラーニング（自ら学び続ける姿勢）に入学以来、取り組んでいることでしょう。みなさんが、その学びを自己啓発、自己研鑽し、時には友と励まし合いながら続けることで、本学を巣立つ頃には、すばらしい学修成果を开花させ、成し遂げたという達成感と充実感を惜しみなく味わうことができることでしょう。

その道のりは険しく、自身が思い描く理想の看護師像と現実とのギャップに悩み、「自分は看護師に向いていないのでは?」、「自分に適性があるのだろうか?」と思い悩み不安に苛まれることもあるかもしれません。しかし、多種多様な高さのハードルを1つずつ確実に飛び越えようと惜しみなく努力しているその姿は、きっととても美しく自信に満ちた勇姿に映ります。

ところで今、敢えてみなさんにシンプルな質問をします。

「対象者（患者さん）が看護師に求めていることとは何でしょうか？」

「どんな看護師を患者さんは望まれているのでしょうか？」。

「なぜ、そんな簡単な質問を？」と思われる人もいるかもしれませんが、もちろん、その答えはみなさんが汗水を流し、時には涙（嬉し涙、悲し涙）を流すことになるかもしれない看護学部生としての大学生活の中にも隠されています。

この話の続きは文末に譲るとして、みなさんが看護学部に入學され、医療人としての第一歩を踏み出そうとする中、メッセージとして伝えたい言葉があります。それは、看護の4つのKの心「感謝・寛容・謙虚・献身」と「見返りを期待しない心遣いや思いやり」。そこには4つのKの心をもって、相手と真っ直ぐに向き合い、相手に関心を持ち、常に相手の立場に立って物事を考え、相手の心の動きや気持ちのありようまでをも感じ取り、行動に移すことができる“感性”が必要だということと、その行動のモチベーションには損得などという打算的な概念が全く存在しないという深い意味を含んでいます。

そして、その“感性”を研ぎ澄ますためには、練習する必要があります。看護学という専門科目を学ぶことを通して、この練習を続けていけば、無意識下で“実践”できるようになっていきます。無意識にできるという点だけを例えればそれは、自転車に乗る練習に似ています。練習をしているうちは、必要以上に意識してハンドルとペダルを操作しなければ倒れてしまいますが、そのうちそのような意識をしなくても無意識に乗れるようになるのと同じようなものです。脳科学を学んでいるみなさんなら話が早いでしょう。

話を戻しますが、本学部の教育方針の本質は、実は、無意識下でこの“研ぎ澄まされた感性”と“真心”を持って看護を“実践”できるかどうかを問うているのです。このことは本学の建学の精神に基づく教育理念からきているのです。

《 建学の精神『教育は徳なり』に基づく教育理念》（学生必携p.1をご覧ください）

学究の友よ

知性を高め感性豊かに

自己啓発に努め

思いやりと素直な心を大切に

誠をもって

万人に尽くさん

さらに、この理念は現代医学で今、最も求められている「全人的・包括的医療」の中核に通じる理念なのです。「全人的・包括的医療」とは、特定の部位や疾患に限定せず、患者の心理や社会的側面なども含めて幅広く考慮しながら、個々人に合った総合的な疾病予防や診断・治療を行うチーム医療であり、前述の“実践”に裏づけされた看護によって、自分で考え“献身”的に行動できる精神力、対象者の変化に気づける観察力、“謙虚”に学ぶ姿勢、人に対する思いやりや心遣いができる“寛容”な共感力、そして人や物事に対する“感謝”の心がなければ実践できない究極の看護と言っても過言ではないのです。

最後に、前段のシンプルな質問の答えは、本学部での“学び”を卒業後の2年後、5年後、10年後にもう一度振り返ってみてください。すると、振り返るたびに答えが変わっていくことに気づくことでしょう。もちろん答えは1つではないので、答えが変わっていくことに戸惑ったり、自分には信念がないのだろうかなどと悩む必要は全くありません。なぜなら、答えが変化していくということは、振り返っている未来のみなさん自身が、人として、医療人として本学部で培った“徳”をさらに涵養しながら学び続け、素晴らしく成長し続けている証にほかならないのですから……。